

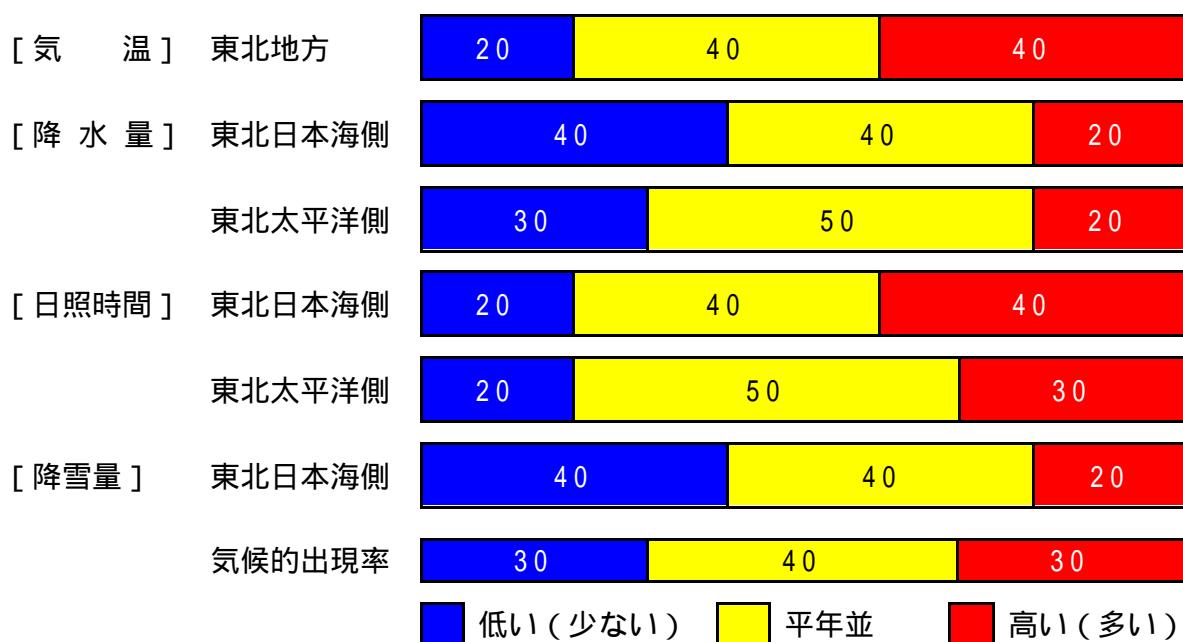
# 東北地方1か月予報の解説(予報期間:12月23日~1月22日)

平成12年12月22日 仙台管区気象台

## 0. お知らせ

12月22日と29日に発表する1か月予報は、1961~90年の30年平均値に対して予報しています。しかし、予報文2ページ目の参考資料に掲載している30年平均値及び平年並の範囲は、2000年1月1日以降については1971~2000年の30年平均値に基づいて算出された値となっています。1961~90年に基づく30年平均値と比べて、降水量と日照時間はほぼ同じですが、気温は向こう1か月、2週目、3~4週目でおよそ0.5高い値が掲載されています。また、階級区分の変更に伴い平年並の範囲は気温の3~4週目が若干狭まっています。

## 1. 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)



[気温]: 東北地方は「平年並」か「高い」の可能性が大きく、その確率はそれぞれ40%です。「低い」の可能性は20%と小さい。

[降水量]: 東北日本海側は「平年並」か「少ない」の可能性が大きく、その確率はそれぞれ40%です。「多い」の可能性は20%と小さい。

東北太平洋側は「平年並」の可能性が最も大きく、その確率は50%です。次に大きい可能性は「少ない」で、その確率は30%です。「多い」の可能性は20%と小さい。

[日照時間]: 東北日本海側は「平年並」か「多い」の可能性が大きく、その確率はそれぞれ40%です。「少ない」の可能性は20%と小さい。

東北太平洋側は「平年並」の可能性が最も大きく、その確率は50%です。次に大きい可能性は「多い」で、その確率は30%です。「少ない」の可能性は20%と小さい。

[降雪量]: 東北日本海側は「平年並」か「少ない」の可能性が大きく、その確率はそれぞれ40%です。「多い」の可能性は20%と小さい。

## 2. 予想される天候の特徴

( もっとも高い確率の予報が実現した場合の天候は以下の通りです。 )

### 向こう1か月

冬型の気圧配置は長続きしないでしょう。東北日本海側は平年に比べ曇りや雪または雨の日が少なく、東北太平洋側は平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

平均気温は平年並か高いでしょう。

平年の晴れ日数：東北日本海側約6日、東北太平洋側約19日

### 各予報期間の天候の特徴

1週目…………… 明日(23日)から明後日(24日)にかけて気圧の谷が通り、  
(12月23日～12月29日) 天気がくずれるでしょう。その後は冬型の気圧配置が強まり、東北日本海側では雪の日が多く、大雪となる所もある見込みです。東北太平洋側では沿岸部を中心に概ね晴れるでしょう。

平均気温は平年並の見込みです。

平年の晴れ日数：東北日本海側約2日、東北太平洋側約4日

2週目…………… 冬型の気圧配置は長続きしないでしょう。平年と同様に、東北(12月30日～1月5日) 日本海側では曇りや雪または雨の日が多く、東北太平洋側では晴れの日が多いでしょう。

平均気温は平年並の見込みです。

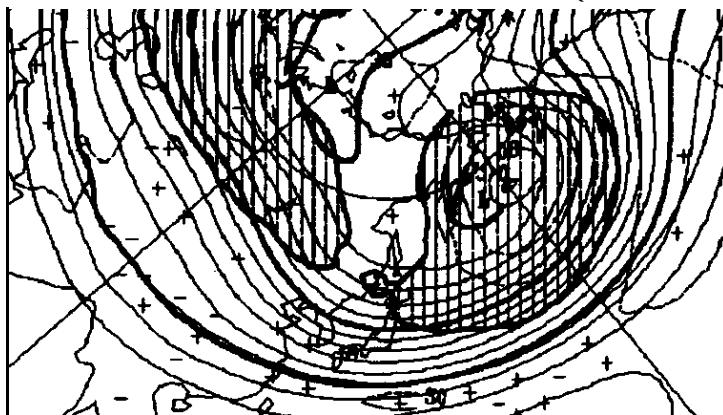
平年の晴れ日数：東北日本海側約1日、東北太平洋側約4日

3～4週目…………… 冬型の気圧配置は長続きせず、気圧の谷が周期的に通過するでしょう。東北日本海側では平年に比べ曇りや雪または雨の日が少なく、東北太平洋側では平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

平均気温は高い見込みです。

平年の晴れ日数：東北日本海側約3日、東北太平洋側約10日

### 予想される天候に関する循環場の特徴（アンサンブル平均天気図）

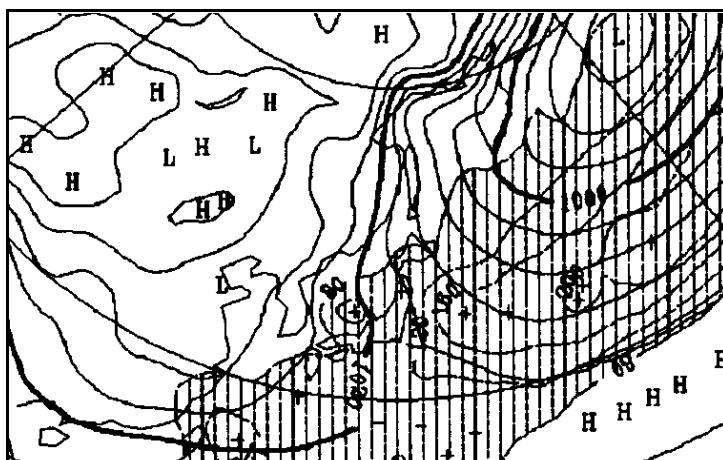


月平均の 500hPa 高度・偏差  
(等高度線 : 60m 毎、偏差 : 30m 毎、陰影部 : 負偏差)

#### ・ 500hPa 高度・偏差

月平均で見ると、極付近は正偏差で寒気放出期だが、負偏差域はバイカル湖付近とアリューシャン近海。日本付近は北海道がこの負偏差に覆われるが、東北以南は広く正偏差域が広がる。日本付近の偏西風は東西流が卓越しており、周期変化が基調だが、時々は寒気の影響を受ける見込み。

週別（図略）では、1~2週目は日本付近が負偏差に覆われ寒気が南下し易いが、3~4週目は日本付近が正偏差域となり、寒気が南下しにくい。

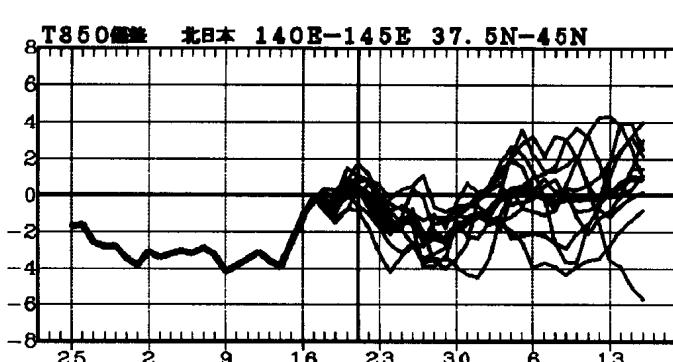


月平均の地上気圧と降水量  
(等圧線 : 4hPa 毎、降水量 : 40mm 毎、陰影部 : 80mm 以上)

#### ・ 地上気圧と降水量

月平均で見ると、中国大陸に高気圧があり、西日本に張り出す。一方、ベーリング海では低気圧が発達して、日本付近は冬型の気圧配置となっているが弱い。まとまった降水域は日本の東海上だが、日本付近広く降水域に覆われる。

週別（図略）では、1~2週目に冬型の気圧配置となるが、3~4週目は冬型の気圧配置も弱まる。



北日本 850hPa の気温平年差の実況と予想

（縦軸 : 気温平年差 ( ) 横軸 : 日付）

発表日以降の太線は各アンサンブルメンバー（細線）の平均値

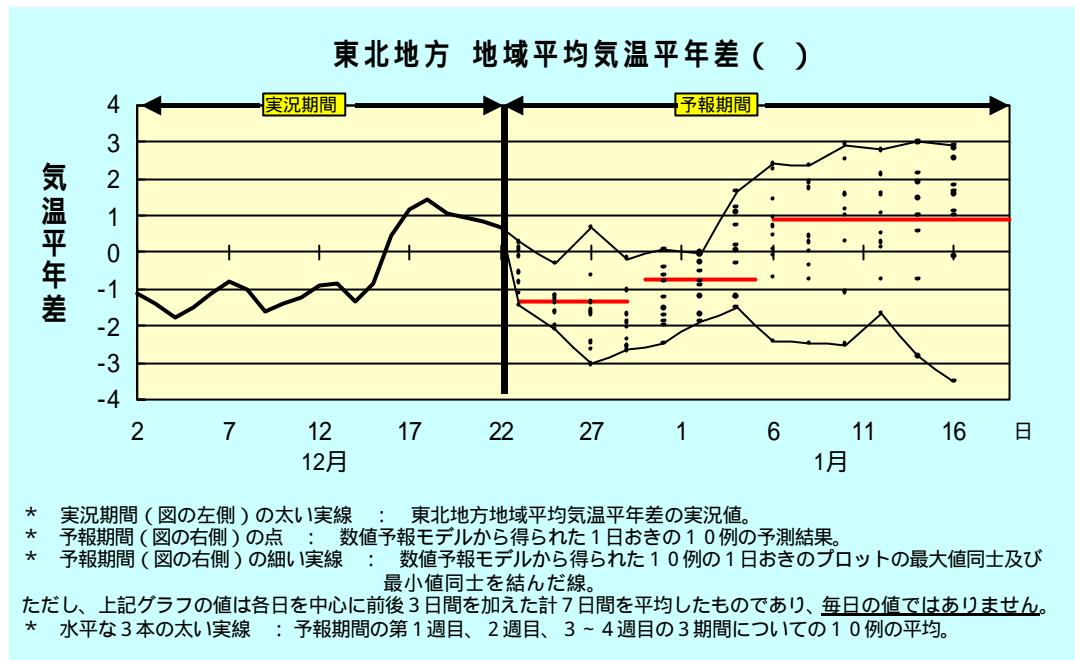
#### ・ 北日本 850hPa 気温平年差の時系列

アンサンブルメンバーの平均は、1週目は平年より低いが、2週目以降はほぼ平年並で推移する。ただし、3~4週目にはばらつきがやや大きくなる。

なお、最近は 850hPa の気温よりも地上気温が 2 程高めになる傾向が続いている。（次ページ東北地方地域平均気温平年差図参照）

### 3. 東北地方地域平均気温平年差の実況と予測結果

週別の気温は、1週目「低い」、2週目「平年並」、3~4週目「平年並」を予測している。1週目は週間予報資料から「平年並」とする。また、2週目以降は北日本 850hPa 気温平年差の時系列と実況経過から予測を高く修正し、2週目は「平年並」、3~4週目は「高い」とする。アンサンブルメンバーのばらつきは3~4週目に大きくなるが、信頼度は大きいと考える。

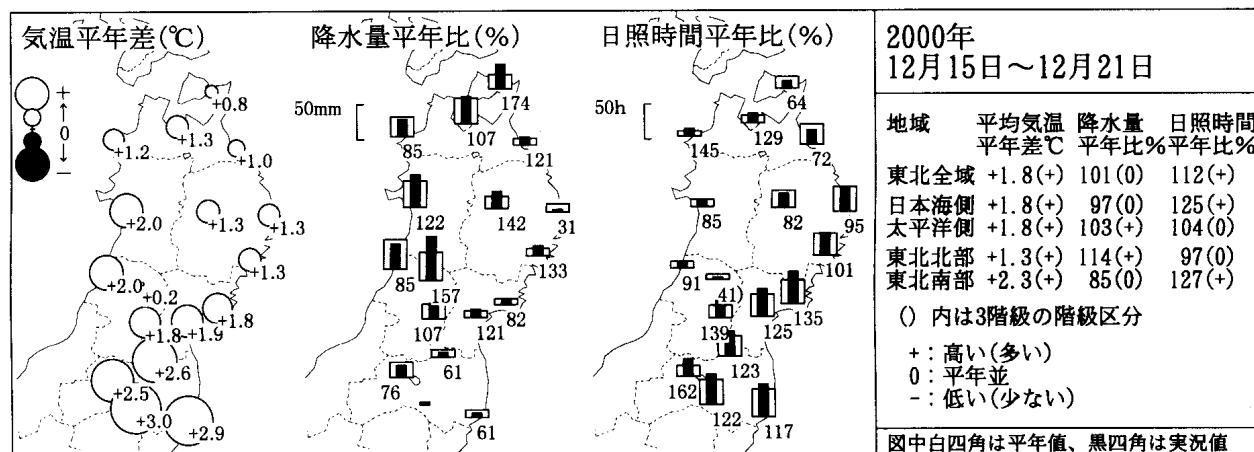


### 4. 最近1週間（12月15日～12月21日）の天候の経過

この期間、前線や低気圧と高気圧が交互に通過し、天気は概ね周期的に変化した。強い寒気は南下せず、降水は雪ではなく雨となる日が多くかった。

特に、19日は日本海から東北地方を低気圧が発達しながら通過したため、大荒れの天気となり、東北各地で暴風による被害が発生した。

平均気温は、東北地方で平年差+1.8と高かった。降水量は、東北北部で平年比114%と多く、東北南部で85%と平年並だった。日照時間は、東北北部で平年比97%と平年並、東北南部で127%と多かった。



最近1週間の平均気温、降水量及び日照時間の平年差（比）